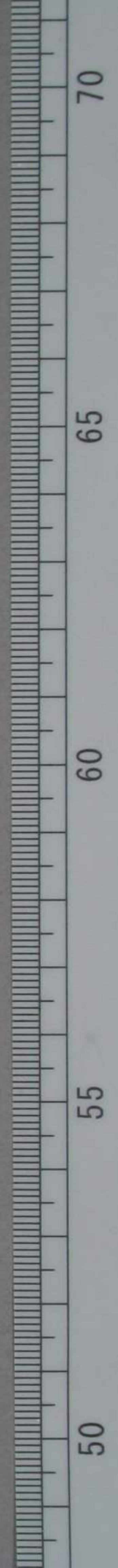


ປະເວັດບຸໂພນະທະນະ

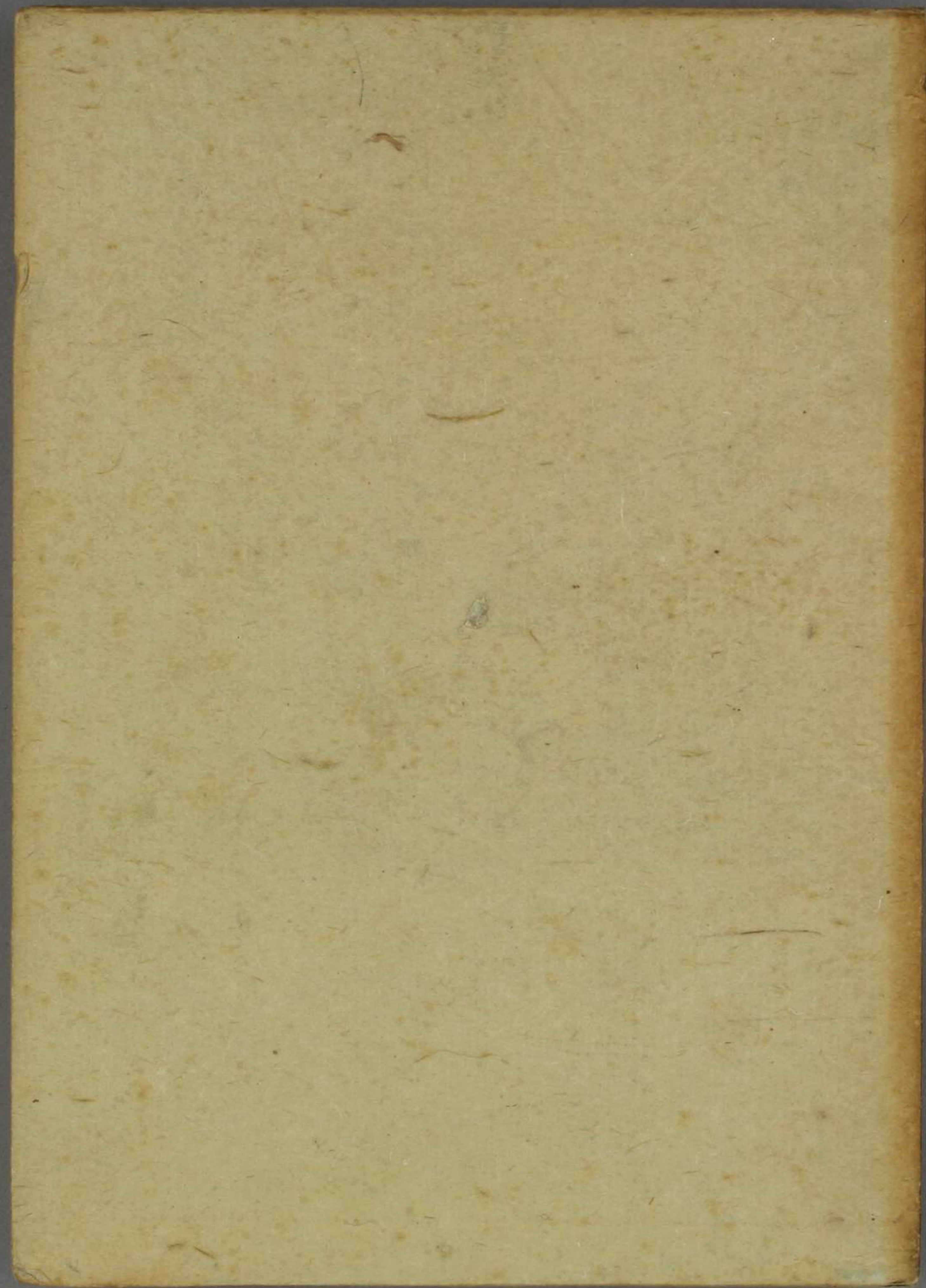
ສີເປະກະ ທະສີທະ
ນະກະມິນະ ທະນະທິທ

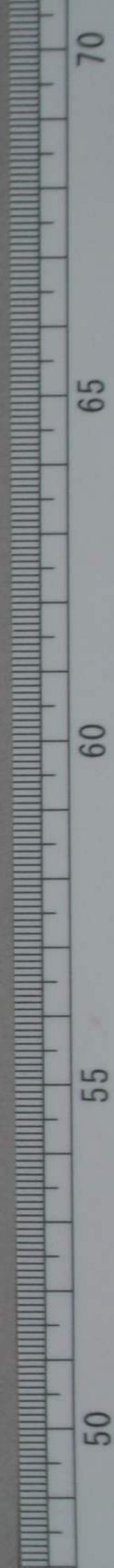
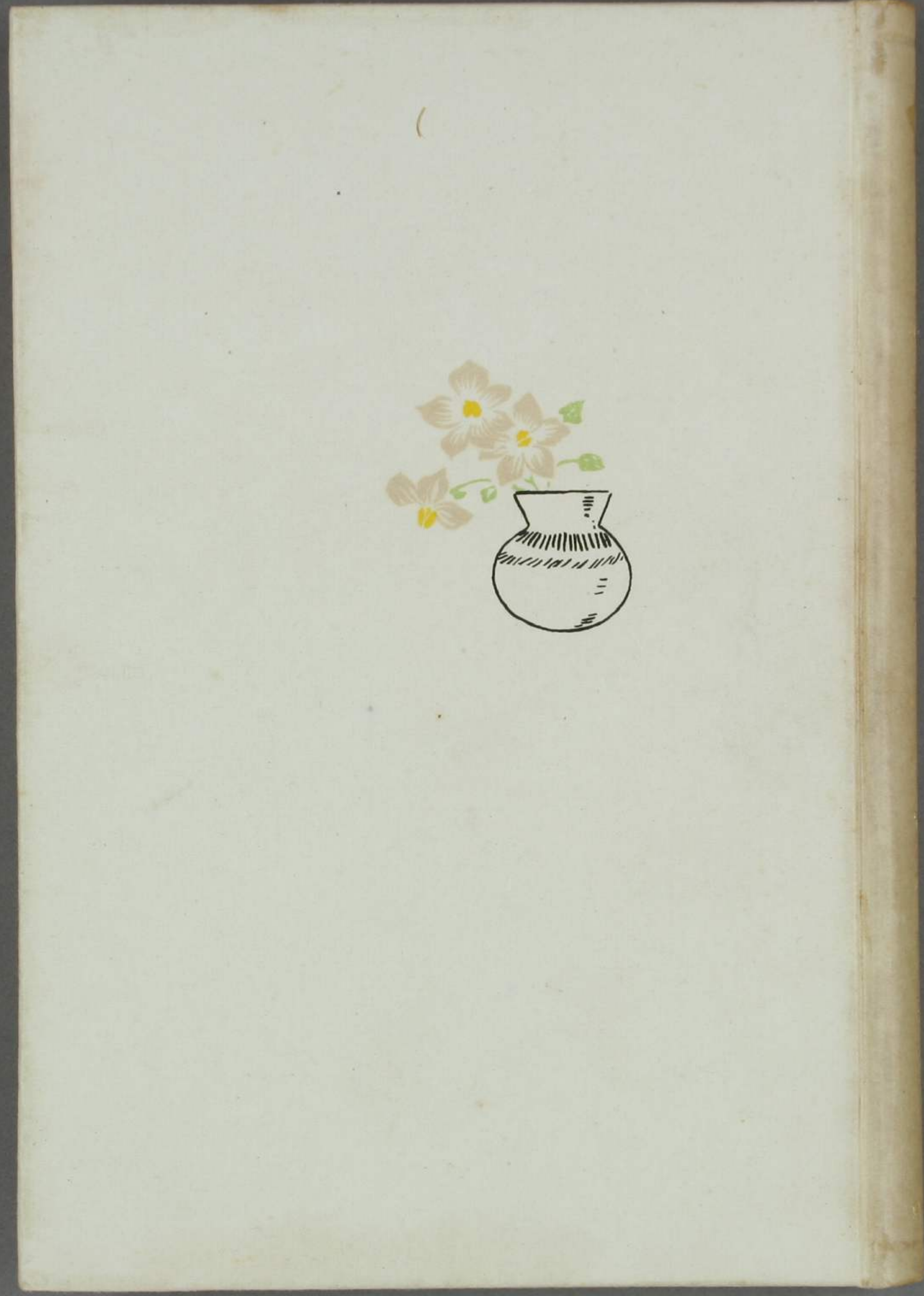


歌集馬鈴薯の花

中島
村木
憲赤
吉彦
合著

院書今古







歌

集

馬鈴薯の花

中島

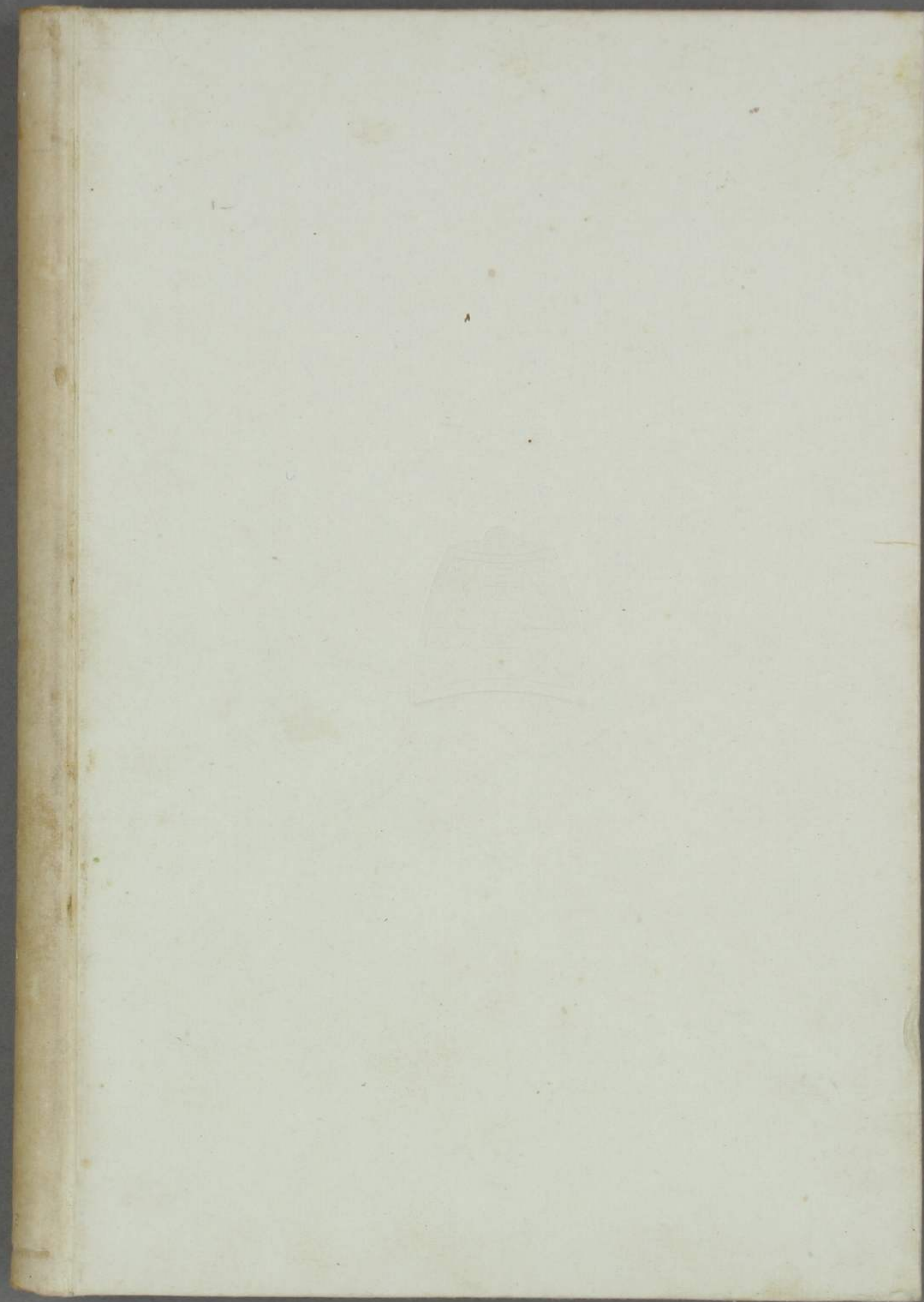
村本

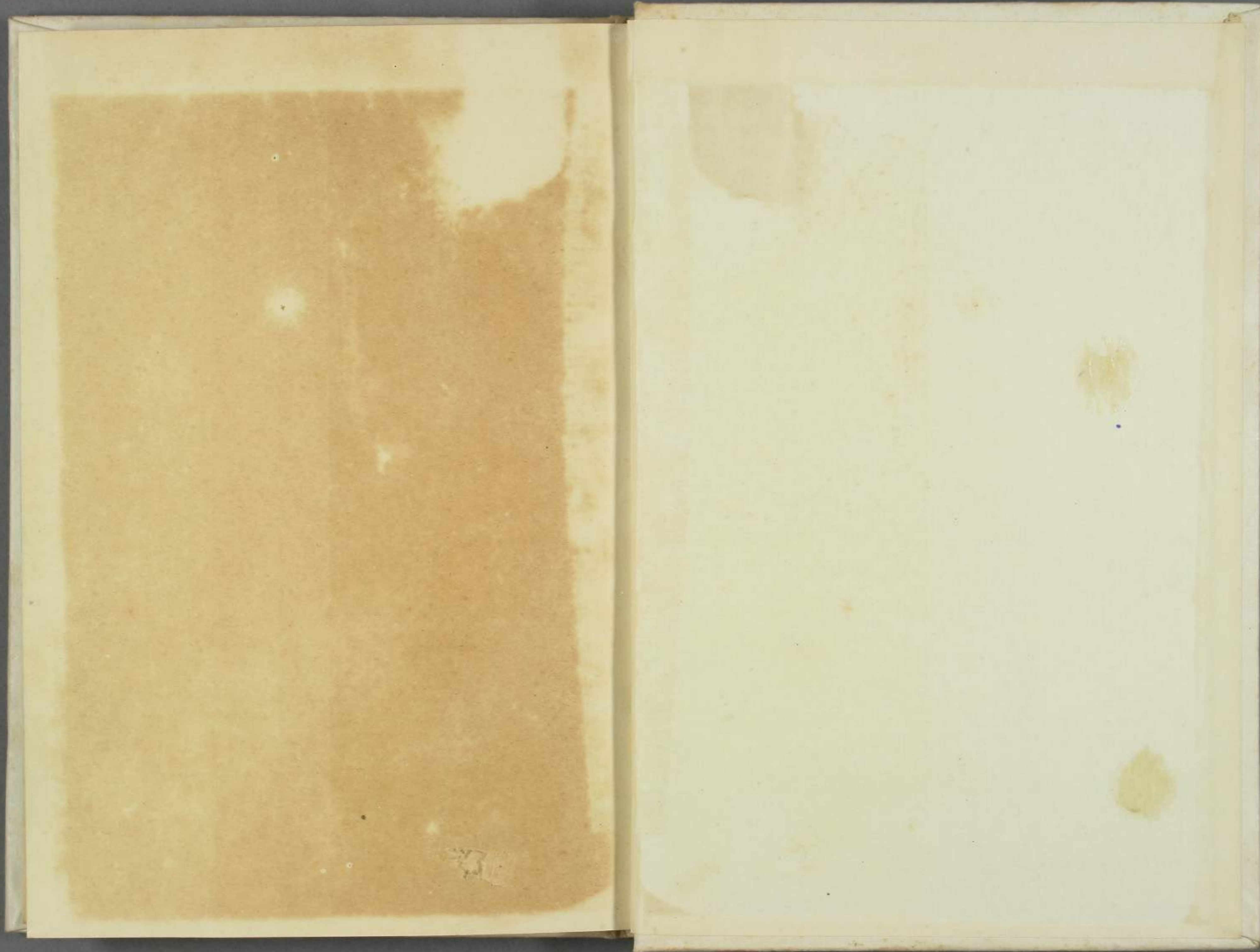
憲彦

吉彦

介著

院書介古





中島水島
中島水島
中島水島
中島水島

歌集馬鈴薯の花

東京古今書院發行





中島
村木
憲赤
吉彦
合著

アララギ叢書第一編

歌集
馬鈴薯の花

東京
古今書院發行

目次

島木赤彦

明治四十二年 (十首) 一
 明治四十三年 (二十一首) 一七
 明治四十四年 (四十九首) 三七
 明治四十五年 (百五十一首) 九一
 大正二年 (四十首)

中村憲吉

明治四十一年 (十九首) 〇七
 明治四十二年 (十六首) 一七
 明治四十三年 (二十八首) 二五
 明治四十四年 (七十四首) 三九
 大正元年 (五十九首) 七三
 大正二年 (百三十七首) 九九





南無阿彌陀佛

島
木
赤
彦



明治四十二年

○ 森深く鳥鳴きやみてたそがるる木の間の水の
ほの明りかも 上高地温泉四首

○ 久方の朝あけの底に白雲の青嶺あなねの眠り未だこ
もれり

○ 一人ゐるいでゆの日かず山に馴れし思ひのす
るもさびしくありけり

○ 花原の道はきはまる森の中の静けさ思へば鴨
鳴くきこゆ

げんげ田に寝ころぶしつづ行く雲のとほちの
人を思ひたのしむ 客居六首

妻子らを遠くおき来ていとまある心さびしく
花ふみあそぶ

○ げんげんの花原めぐるいくすぢの水遠くあふ
夕映も見ゆ

夕日さすげんげの色にかへるべき野の家思へ
ばさびしくありけり

ゆふされば母が乳房をふくみ寝ぬる幼な心地
に花にこもれり

物思へば思ひはてなき胸のものをおほにおほ
ろに花にやすらふ

明治四十三年

草枯の野のへにみつる晝すぎの光の下に動く
ものもなし 廣丘村

冬枯の野に向く窓や夕ぐれの寒さ早かり日は
照しつ

○ 冬の木の白き莖立ほのぼのし夕日ののちの野
にみだれ見ゆ

○ 冬野吹く風をはげしみ戸をとびて夕灯をとも
す妻遠く在り

ところどころ野のくぼたみにたたへたる雪解
のにごり静かなるかも

はるさめの筑摩桑原灰いろに草枯山の遠薄く
あり

草の中の家あちこちと夕ともす灯のひかり雨
に濡れて見ゆ

雨あがる深蒼原にひとしきり暮れの名残の明
るみにけり

いささかの丘にかくろふ天の川のうすほの明
りその丘の草

かかる國に生れし民ら起き出でて花野の川に
水を汲むかも

○いとつよき日ざしに照らふ丹の頬を草の深み
にあひ見つるかな

草の日のいさきれの中にわぎもこの丈けはかく
ろふわが腕のへに

○夏草のいよよ深きにつつましき心かなしくき
はまりにけり

さ夜ふかき霧の奥べに照らふもの月の下びに
水かあるらし

霧明りかくおぼろなる土の上にとほく別るる
人やあるらん

この朝け障子ばりする縁先きの石のはだへに
さ霧ふりつつ

湖のあふれ未だ引きやらぬ稻原の夜のいろ深
し稻光りする

○ 露霜をしげみ寒けみ富士見野の龍膽の花紺な
らんとす

とりいれのをはりの豆を打ちをへて蒔をたた
む日暮の夫婦

15 ○ この山の紅葉に來つつ家の人と夜々の炬燵に
したしみにけり

明治四十四年

16

○ 小夜ふかく炬燵にゐつつ庭つづき原なること
をさびしみにけり

草枯の國のくぼみにかたまれる沼のいくつに
日あたりにつけり

いささかの心動きに冬がれの林の村を去らん
と思ひし 廣丘村

この朝け霧おぼろなる木の影に目のけはひし
て鳥鳴きにけり

冬川原日にけに涸るる水を追ひて菜洗ふ娘ら
の集まりにけり

短か日の川原をいそぐ乏しらの水のあよみよ
寒けかりけり

いささ瀬の水にうつろふ夕映ゆふばえに菜洗ふ手もと
明るみにけり

斯くのごとかなしき胸を森ふかき青蘚あざむすひの上に
一人居りつつ 林の村を去る六首

この森の奥どにこもる丹にの花のとはにさくら
ん森のおくどに

二年を物思ふとき安らかに我を置きたるかな
し森はも

この藓に來てあそびたる友二人亡き人となり
しきのふの如し

春ひと日雪とけきゆる青藓の林のにほひ日を
浮けにけり

この森のをはりの歩みやはらかに藓に觸りつ
つ日は暮るるかな

眼のまへにその人はありとこしへに消えてゆ
くべきその人はあり

23
いち日にちの尊たかきことをつくづくと心に沁みて手
をとりにけり

たまさかに人のかたちにあらはれて二人睦び
ぬ涙ながるる

うつくしく消えてかへらぬ星屑のとはの光を
知りそめにけり

やせ松の松かさたたく小鳥らの嘴寒からんこ
の朝の霜に

○つかま野の冬木の松のまばら松小鳥と我と住
み馴れにけり

苗香うみぎやうの花の静みにほのゆるる宵のかをりや星
に沁むらん

うるきやうの花の畑に宵はやく眠れる星を二
人見にけり

静かなる曇りのおきに火の星のほのかに赤し
涙ぐまるる

貧しき家に生れて遠き國に行くべきものと思
ひ行くかも 遠く行く幼弟に四首

ちちははは老いていますと思ひつつ行きゆく
ままに遠く行くらん

五月雨の青葉の家に安らかにしづかに汝れを
おく時過ぎぬ

生れたる家にいくらも住みあへず薬をもりて
奥蝦夷の家に

眞菰草風通しよき池の家の晴れのいち日よし
さきり鳴くも いち

物おもひ晝寝ひるねに入れる夢の人の家をしづかに
よしきり鳴くも

しが肌はだかぜのさはりの遠ざかりうつらうつら
に夢に入るらむ

○めざましき若葉の色の日のいろの揺れを静か
にたのしみにけり

○眞菰風吹きふく風に今日ひと日しづかにあり
得しことを思ひぬ

おぼつかなき雨のあがり夕方の麥の黄ばみ
はうすほのめけり

おぼほしき曇りの中に遠き麥の黄をくさやかに
洩る夕日あり

高原の村に来てすみ家の人とすこししたしみ
茶をのみにけり

○ 若葉するこの村に来てあはれなる話を二つき
かされにけり

ほろび行く湖^{うみ}べの村に一夜寝てとぼとぼ行き
ぬ山のそこひを 富士八湖七首

静かに一人遊ばんと来りつる山のみづうみ暮
れ入りにけり

かく澄める山のみづに来てたまさかにひと日^ひ
を遊びかへり行くかな

湖づたひ若木しみみの葉をひたしふりふる雨
のやむ日を知らず

焼石原雨にさび立つみどり木の木ぶかく寒く
我をおくかな

降りにふる日ねもすの雨に山の裾ひろら青野
も今萎るべし

古繪圖の埃はらひて静かなる湖を驛を其所に
見ること 女坂峠より

ゐろり火の次の室くらく宵ふけて物さびしら
にいや火を焚きぬ 裾野の家六首

夜をおそく茶をのみをへて何となく足らはぬ
思ひ火を焚きたきぬ

しづかなる事ども思ひ火を焚きて起きてある
ことたぬしかるかも

更けの火のうつらうつらに遠人を思ふともな
しぬくとくになりて

○あが心は静かなるかもゐろり火の揺れのうす
れの壁に揺る影

ゐろり火のもえのさかりをもだしつつ何はも
我は思ひ居るらむ

草の中の赤錆び水におきてある夕日の舟は死
にてあるかも

さやさやし蕎麥の花畑風のむた動くを見れば
我もゆるるがに

明治四十五年
大正元年

○ たまたまに汽車とどまれば冬さびの山の驛うきに
人の音すも 山の驛八首

○ この朝の汽車はすぎけれ家並なみの日あたりおそ
く静かなるかも

山の驛霧のしづくのそぼそぼにをみなのともし
ら濡れて來にけり

物を煮る店のゐるりに曉がたの面わやさしく
さ霧流らふ

肉を賣る家のうしろに野の木立夕焼さむく枝
をひろげぬ

うすれゆく夕日の驛に客を呼ぶをんなの聲は
うれし聲かも

霜晴れの夜空のうまや路いづべにかだみ聲お
そく唄ひのこれり

栗焼きし火鉢の色も火の色もつめたく遠くす
ぎ去りにけり

朝照る日のうすら霜ひえびえと蓼の丹莖にと
 けて沁むかな

馬ぐそに深くかぶさる朝の霜この澤の道に我
 れ動くかな

あさの霜とけて流らふ庭石の日の冷めたさを
 踏みて入りつる

○ 枯菰に水は動かず底淺の泥明かあかと日あた
 りにけり

あるものは萩蒨日和木瓜ほけの果みを二人つみつ
 相戀ひにけり あるものは四首

あるものは髪をなほすと嫁ぎゆきて春の簪上
 げぬ別れ來にけり

○あるものは草荊小屋の草月夜ねぶりて妻をぬすまれにけり

あるものは金ある家にとつぎ得て蠶がひ篋れぬ病みてかへらず

うら若ききよら心に鞭あつることはたやすしあはれなるかな 女をあはれむ三首

天地の千とせの後にささやけきうつくし心を誰か知るらん

たまたまに物かけに行きて涙ふくうら若かひなむごきことすも

霜らしく白けし草にちやうちんの光揺れゆれ野をのぼるかな

日の没りの名残りの明りうすらすとわがかへ
る野の家見ゆるかな

野の家に火をあかあかと一人して心安らにね
むり得るかな

○家をそとに三年馴れつつ宵さむき火桶のうへ
に手をよせにけり 玉川村

火に倚りてまなこつぶりぬ遠々に野に来て住
みし身を思ひつつ

いち日のをはりしづかに見えきたる幼なおも
わをうすら火のへに

○ 死火山の裾野の冬のなほ長さ日數ひかず思おもひつつ灯
をともしかも

西窓のうすら明りに藁をうつ隣のおとのはや
聞え居り

○ 枯芝の土手の日あたり折々に土のかわきのこ
ぼるるけはひ

暁の温泉の霧低く沈みつつ氷の湖うみに流れ行く
かな

檣唄もなき土地なれや氷の湖霽さむざむに影
動きつつ

おぼほしく眉に來觸るる霧しづく食しよくをもとめ
て朝を行くかな

岸の家日の没りはやくともす灯の氷の湖にう
すくいくつも

冬枯原吹きあるる風の西窓に日ねもす鳴りぬ
日を明かあかと

灰いろの草がれ道を毛物にてあるが如くに思
ひて動く 丘より町に歸る途上四首

板の上に煙草のほくその吹かるるに似たりお
のれは野をいそぐなり

○ 白ざれの粟あは程がら畠はたに立ちとまり何思ひしか今忘
れたり

ひよろ長き草の枯れがらにいや深に疲れ心の
觸ほり行くかな

森深く丹の花咲きき吹く風もそこに寂しく冷
めたくありき 想ひ田五首

丹の花は揺れて静みき森の風の流らふ蘇そよはた
だ青かりき

うつらうつら丹の花のへに眼をあきて見てあ
るままに夢かと思ひき

日の暮るる蘇の青みに身ひとりの頬を觸ふりつ
つ涙流れき

里芋のちひさ島を森に入りしおのが姿の今見
ゆるかな

一つの赤ぬり馬車に春の雪の重くうつくしく
走りて行くよ

野の朝の土のしめりに春らしき光を踏みぬ町
にむかひて

○ 草枯の土ひそやかに愛らしき春龍膽はるりんたうは眼をあ
きにけり

○ 枯草のそよぎのかげに暮れてゆく春りんだら
は幽かなるかも

障子しめて廊下に出てぬかくの如わけなきも
のに別れてしまひぬ 別れて後に六首

廊下の板に足うらのさはるとき我らは長く別
れてありぬ

夏蜜柑ひとつ貰ひて持ちてある思ひはかなく
汽車動くなり

腰掛けてベンチにありぬ乾からびしあまたの
顔が我が前にありぬ

口かずを餘りさかずに別れしがま寂しきかな
懐しきかな

我らのかなしひびき睡ひびきの合ひたるがかの夕の灯にい
くほどなりし

蛙のはなしもやみぬ二人して遠き蛙に耳かた
ぶけぬ 眞鍮の火鉢六首

煙草のけぶりの末も見えぬまで庭の茂りは暮
れてありけり

夕はやく冷え來る縁えんにうち觸るる寂し肌へを
顛はせにけり

向つ家の二階の窓ゆ暗き木に燈がさしそむる
ひそか心や

障子の紙もしめりぬかそかなる家ぬちに入り
て灯をともすなり

○ 二人して宵さびしければ眞鍮の火鉢によりて
火をふきにけり

春草の日陰の水にひとり飲む小さき禽ささの喉が
かはゆや 寂しき禽六首

草の水細きかよわき嘴入れて小禽は眼をもつ
ぶり飲むかや

胸の毛の短か若毛をうち濡らし禽はかよわく
身振ひにけり

草の中の若鳥思へばあが胸の底にやさしく來
るけはひすも

春おそき光の中にいささかの草のかけして籠
るなりけり

草の中の寂し鳥にていつまでも其所にあれよ
と涙流るる

このごろは多く曇れりおろおろに涙流れて籠
る日もあり

つとめに出てねばならず薄ら日の曇りの窓に
ズボン穿くひとり

○ ひるの土に下駄の音して入り來つる人を誰れ
かとひそみ居るなり

まどまらぬ疲れ心のおぼろかに法師姿が見え
来るかな

生きてあらばこのはかな身のほそぼそに髪を
おろして住む日もあらん

夏桑の茂りに壓おさるる窓の下いく日か經にし
我がよわき肌は 夏家居十一首

夏の桑黒き青みにあが心日にけに染みて腐る
なりけり

○ 疲れてあつき座敷にまるぶ我れに何びとも物
を言はずしてくれよ

斯うしては居られぬやうな底心かゆくなり來
る桑の光りに

はかなくひとりいねてあれ、今宵もあまた蚤
来て我をはむらん

父らしき臭ひすればか子らあまた暑く苦しく
よりて来るかな

暑苦しく寝ころびて居れば汽車の響きとろと
ろと来る日も腐るかに

玉蜀黍の穂は思ふことなきやうに夕日の風に
揺り眠るかな

かひこが、皆死にしかば南瓜さる早きおそき
をいさかひにけり

蟲が来てランプに鳴きぬ夜の室の古き壘に寝
反れる子どもら

わが燈は桑のしげりの奥深く死にて冷めたき
ものを照せり

萱草くわんぞう花の夕日の川に出でしとき別れは其所に
待ちてありけり 三首

夕日の朱しゆを吸ひ盛さかるくわんざうの花に男はあ
はれなりけり

今別れんとする心の静けさ、くわんざうの夕
日の朱あけは死にて動かず

山にしてはや秋らしく鳴く蟲を抱きてやりた
き宵ごころかな 木曾籤原六首

雨たまる驛うまやの道にうすらなる灯あかりをなげて櫛
賣れるかな

重もあもしき木の屋根竝びうまや路を晝ひそ
やかに我行きにけり

山にして蟲なくなべに峽の底家も沈みて行く
心地かも

河みづのあの幾筋に分れたる砂原に居らば寂
しかるらん

夕白く河原母子草のうち靡く川はらに來て見
るさびしさよ

雨あがる夕べの寒さ何所よりか日影洩れ來ぬ
襖の上に 家居四首

桑つみに行きたる妻もかへらねばおのれ一人
を暮れめぐるかな

家の隅桑に飢ゑたる蠶らもわがともす灯をう
れしかるらん

畑の上黄の蔓枯れのいちじるく夕にほひつ
黒ずみにけり

向ひ家の南瓜の花は屋根をこえて延び來るか
な黄の花を向けて 南瓜の花五首

南瓜の花見てあれば啞娘いくたりも來て窓に
並びぬ

うつくしき啞娘らがあはれげに南瓜の花にか
へりゆくかな

暗しくらしかの唐茄子の花底に蜜吸ふ蛇もく
さり居るらん

娘が、工女となりて行きしかば南瓜の花に家を任せぬ

まだ解かぬ荷のかたはらにあはれなる我が子を
おさぬ毛布をさせて 病院の前の下宿九首

膝の前の冷めたき穴に重もおもと幾日の灰の
濡めり居るかな

畳の、久しき冷えが三人を待ちて居しよな座
わり心かな

○あはれなる父はほとなりてすわり居るあが膝
すらを疑ひにけり

いづこに今日來りしか知らぬゆゑに母の膝べ
に眠り居るかな

すぐ其所に見ゆる怖れを黙もだしつうつろの部屋を見まはしにけり

疲れつつ眠り入りたる子のそばに帯をほどきぬあはれなる妻は

○ 寂しき、二人ごろのしたしみに茶のみ茶碗を買ひに行くなり

ひそましき障子のけはひに來て觸るる夕日も心寄る我等かな

夕まぐれ街に沈める煤ほい煙えんに灯火ともしび鈍くにじみそめつも 岡谷三首

けむりの街冷めたき人の眼のごとき雨が降り來て肩しめるなり

ふいごの、火を吹く光りに人間のをはりの顔
が赤く動けり

稲の色に雨ふる晝の静けさに沼の肌はだへに舟う
かぶなり

静かに暮れゆく沼に黒き舟波動かしてあさり
居るかな

雨もよひ暮れひそみたる沼の上うれしや舟に
灯がつきにけり

霧らしきうすき湿りにつつまるる遠き灯あかりを戀
しみにけり

町の灯の遠空明かし湿りたる夜のけはひの水
にほのかに

毎晩、もみてもらはねば眠り得ぬ氣だるき肉
と今はなりつも

按摩の、指のさはりのうつうつと疲れねぶりに
ねぶり行くかな

この一室ひとむろまいばん頬を寄せ馴るる火鉢ひとつ
はかほゆかりけれ 東京十四首

おのが身に思ひかへればつまらなく火鉢の炭
をつつきて居たり

あはれなる我身を見じとする心火鉢の灰に唾
吐きにけり

今はこころ分らずなりぬ煙草をば吸ひ吸ふま
まに口苦がくなりぬ

夜の街に出て来て来んかと思ひつつどよみの音
に疲れたるかも

夜の街どよみを止めぬ灰の上に火鉢の縁かぢの影
する寒さ

牛屋の、鍋の香による人だから其のなかの我
が膝がしらかな

都の、どよみの灯影とほく来てここにひそめ
る濠明りかな

○ 丘のうねり暮れ靡くかな夕焼の雲の下には街
の灯見ゆれ 鬼子神六首

武藏野の芒の梟買ひに来ておそかりしかば灯
ともしにけり

○ 大槻の冬木の家に灯ともして銅あかがねの錢かぞへけるかも

○ 暮れて洗ふ大根おほねの白さ土低く武藏野の闇はひろがりて居り

歌集を編みてやるよりも死ぬる前に一目逢ひたらばうれしがりたらん

泊らずに歸りし事を東京の郊外に来てさびしく思ふ

丘陵の芒見ゆるにうれしくて家のことはや思ひ居るかも 歸郷八首

疲れたる頭にしみる野の空氣うれしや朝の車の上に

田に並べし新葉束も家の妻にこの日かへるに
なつかしきもの

大根こぐ少女を見れば丘の其處に我が家も近
くある心地かな

谷川の白くするどくいつまでも我につき來ぬ
トンネルを過ぎて

谿深く夕焼の空の我が顔に赤く照りかへるこ
の寒さかな

汽車の戸の雑木の夕日生れたる寂しき國に今
かへり來つ

まこと我を待ちてありやと冬の木の日ぐれの
國のなつかしきからに

野のものみな荇らるれば粗末なる土製の國に
霜むすぶなる

○大根も秋菜も漬けぬ村の女は庭べの土に栗を
うづめぬ

○櫟の、冬葉のかげをくぐり居し禽の羽色はふ
と見えにけり

○柿の皮剥ぎてしまへば茶をいれぬ夜の長きこ
そうれしかりけれ

夜寒の手栗を焼きたる眞白き手さびしかりし
手うれしかりし手

くどく言ふ女の前におとなしく煙草の烟をふ
きて居りけり

水だまりじめじめと草の枯れ寝たる重みにあ
が眼は堪へかぬるかな

すぐ其所に、粟稗の島、白樺の裂けたる幹、
獣の女

破壊れたる女ぞと思ひ向へれば今はくよくよ
愛しくてならず

疲れつつ寝入りて居りぬ壊れたる心うつくし
き寝顔なるかな

ありし日の少女のやうな眼してなぜに今宵は
迎へくるるや

酒のめばほろほろ泣きぬ今は何もあきらめて
ある我が膝にむきて

大正二年

この夕べ柱にかけし洋服の皺は寂しく垂りて
あるかも

今の我をすこし押しさらばそのままに倒れん
とする日は暮れにつつ

○わが側かたに農夫一人黙もくりつつありと思ふも疲れ
んとする

茶を飲みて心静まれ長靴の重みが足につきて
居るかな

丘陵の冬の林を裂くやうに白樺の幹の夕幾いく條まじ
も 林中五首

おのが身に思ひ落ちゆく眼をあげて寒さ木肌
に守られにけり

一と平芒黄いろの日のたまり林を出てし身の
けはひかな

道のへの石のかげにはいち日の霜消えずあり
わが歩みかな

遠くの、灯をこひしがる我が眼つき冬の林の
空透きたるに

○氷のいろ太陽に緩りぬれば船の腹地上に赤く
塗られて居たり 諏訪湖八首

○船孤つ丹に塗らるればさびさびに日は雪山の
かげに没りたり

ま寂しく生れたる身は山かげに赤き船浮く湖
を見にけり

いと長き冬よりさめてささやけき波は寂しく
動きたるかな

孤ひびつにて浮ぶ丹にの船この春も山の湖水にひと
つ丹にの船

このやうにあはれがりつつ身は今赤く濡れ
たる舟に寄るかな

平板に馴れし眼をこそばゆく明るき雲に今あ
ぐるかな

心よわくなりてある身を大切に山べの家に寝
にかへるなり

落葉松の萌黄の芽ぶき快樂の日は心臓にしの
び來るかな

萌黄の目林にみちて健康の丹ほ頬ほの少女こを歩ま
せにけり

うすうすと暮れ入る丘を汽車のゆげは赤くや
はらかく流れたるかな

ひそか灯に今は別るれほのぼのと雨ふる道は
曉けてゐるかな

両側にいまだ眠れる家のさまわが身のけはひ
のいとほしさかな

街道のほこりにしめるこまか雨心は今は消え
んとするに

心よわき我なれば今町そとの雨に佇みて息を
するなり

ひそかなるものを遺して遙々に歩めば今は一
人なるかな

野をとほく歩めるなべに落ちゐつる心おるお
ろ泣き出でにけり

わかわかしき草の平地に出でしかば向股かゆ
く快くなれるかも

嫩草の歩みのさはりしみじみとさびし心の流
れ来るかな

誰かに行きたくなりぬま寂しき草のみどりに
身は冷えぬれば

五六本榛の若芽のふく見つつおのが胸べに手
をさはるなり

子どもはみな悲しさうなる面わしてあが眼つ
ぶれば来て並ぶかな

奥蝦夷は草薙をたらん裸にて體ばかりにかかりてあらん 弟の徴兵検査に五首

公の徴しに召されて今は行く身は細々とやさ
しかるかな

やさしく汝れを生みたる父母は手を額にして
うれひたまへり

膏けのみなぎりさかる皮膚の張りわかき男の
裸體おもほゆ

島に住む男のからだ氣の張りの少しよわりて
草をふむらん

折からよ汽笛あはれに聞え來れ雨ふりにふる
晝萌黄原



○ 鐵瓶の下しらしらと燃えぬればあはれなる晝
の雨は降るなり

○ 下男らは爐に足投げぬ楢若葉雨白々と吹きさ
かる今

廣き圍爐裏女の眼には春ふかき萌黄の雨のし
みて來るなり

七
年
五
月
八
日
下
男
ら
の
足
投
げ
ぬ
楢
若
葉
雨
白
々
と
吹
き
さ
か
る
今

中村憲吉



Figure 10
The figure is seated in a meditative posture, with the right hand resting on the left thigh and the left hand resting on the right thigh. The figure is wearing a multi-layered robe with a decorative border. The mandorla is highly ornate, featuring a central flame-like motif surrounded by a circular border of floral and geometric patterns. The drawing is executed in a simple, clean line style.

明治四十一年

音さしる拵はなつら棹さしの柄はもうさうの風そよぐ葉の
なかに動くも

山の根のけむり立つ家の棟のうへに孟宗もちうの簍さう
しだれかかれり

竹

月の夜を霧にぬれたる竹垣のひかるが上に吾
が影行けり

○女竹垣の桃の根かたを揺ぶりて犬いでし後を
花散りやまず

○新酒桶を伏せしかたへに割る竹の竹紙かろく
春風にとぶ

椿

つばき垣にたてかけ乾せる壘にし花ころび落
ちて前にたまれり

山路の青葉かげろふ岩の井に花つばき朱色に
さびて映れり

○ 櫻島すその松山松まじり咲ける椿にうぐひす
啼くも

白晝の湯に湯氣のなかより窓あくればほの赤
つばき覗さけるかも

雑詠

○ 唐湊山に日は入りぬれど海中は櫻島嶺のあか
あかと見ゆ

むらさきに煙を吐ける霧島は向か國のそらに
ふた峯浮けり

原作第二句「煙を吐きて」第五句「靜かに浮けり」

庭隅にゆふさり來れば眼のごとくボンタンの
實ほのか光れり ボンタンは柑橘類の一種

背戸のべは朝日子さして枇杷の葉の霜解の雫
したたり居るも

甲突川に浸せる布の紅色のゆらぎゆらぎて春
の日さすも

亡兄を悼む

明治四十年九月二十二日、陰曆満月の夜
廣島の客居に年二十二にして逝く

灯のもとにふと思ひづれば亡き兄のくさぐさ
のことが吾れを泣かする

ひむがしの街より月のうらうらと上れる頃を
眼を落しけむ

はらかなら縁みぢかく生れ來て遠世へいなす
眼にさへあはず

○ 枕べの月照る河にさわさわと何か水おとに立
ち行きにけむ

その夏のある夜はいねず月かげに枕をならべ
て語りけらずや

明治四十二年

吹上の濱

松みなが砂にうもれて稍ひくくわが眼のほど
につづく松原

○ 海の邊にかへり見すれば濱のうへ砂高みかも
山僅かみゆ

砂をかゝの裾をめぐりて川ひくく夕映の色を海
にそそげり

空とほき星のあかりに砂原は路かげくろく雪
夜のごとし

ほの白く闇に起きふす砂のうへ海のきはみは
星の空かも

浪かぜのやみ礎そにたちて鳥はいま消けたたまし
くもわが上を過ぎし

松越しに海みつつ行く小まつ原ゆふ日にたま
に鳥のたつかも

夕づく日砂の高みにかぜ跡は波かげのごとく
光りをるかも

野間嶽

○ 夕ぐれの山面を流る霧裡の近きくさ間よひと
下りて來も

○ 飛ぶとりの影も小ぐらくつつみ持ちて霧はな
がるる松の谷間を

雨の嶺はのぼり詰めしを目の下に海暮れをれ
ばうつつとしも覺えず

ふもとなる雨に暮れゆく暗き磯にしら木綿浪
間ともる灯が見ゆ

雨霧はくらし籠よしらじらと嶺に立つ吾れを
吹きぬらし越ゆ

峯の上のひくき夜ぞらよ三日月のあはれなる
かも覗きて行けり

夜の樹々にふと風おちて峯の霧の物の化のご
とたゆたへるかも

○ 遠つづく雨のまつばら風なごみ葉にまつはり
て煙はちららず 加世田海岸

明治四十三年

溪底の湯

溪底は月影くらき水ぎわに湯の小舎ひとつ灯
ともし居れり 鹽浸鶴の温泉

ぬるま湯に仰向き浮けばわが胸に窓越しの星
が濡れつつ落ちぬ

谷底ゆ上ればひたに眼にせまる黒き山尾に沈
む月かも

○谷にのぞむ宿に眠れば耳に遠く地のそこ遠く
水の音きこゆ

○蒼杉のしげる木立のをちここに櫻ほのぼのと
明るく咲けり

旅宵の千鳥

熱に病みて思想あやしく亂る夜を闇のそこ遠
く呼ぶ千鳥かも

騒がしき白晝に堪へねば夜の底を愁はし影に
歩み居るらん

沈む夜の耳にまつはる瀬ひゞきの奥所にし聞
く深き静けさ

もの思ひありつつもとな忘るれば空虚ごころ
に身に入る千鳥

堀内を悲しむ

十月十七日、黎明未だ動かざ
るに彼没す。年僅かに二十三

冬の夜のかく淋しきに訪ひ行けばかの眼光は
も戀ひ迎へしよ

ある夜は泣き居たるあとの眼を恥ぢて繕るふ
汝れをいたしく思ひき

泣きしかのそのこと問はむもいたはしく間遠
の語りにもうら解けん程

なごみなごみ語らひ行けばおのづから汝が面
はるる吾が心さへ

語らひのすすむにつれて更くる夜を淋しきな
れに戀ひ負けてありき

眼つむれば影に浮きくる眼光まなざしに戀ふも術なく
吾れはくるしよ

わたつみの底鳴る音の深きこころ汝が胸の戸
によりて戀ひにし

胸ぬちにゆするこの思ひこのままに物にひび
かず消ゆるかなしも

もの皆に響き足らはずこの頃の消なむ心に汝
を戀ふるかも

いまはべの冷えゆく指を父ははの胸べにおき
て逝きし子ゆゑに

雪來る前

○ 日の暗み野に満ちくればこもり居て吾れにか
なしく心ゆらぐも

曇る日のところを傷み野の空に虚吹く風を寒
みつつ行く

○ 野も山もくもり沈みぬ遠く来れば世は温くぬ
くと風立たずなりぬ

天地の冬さびしつづつ會ひよるや沈黙の曇りを
ものの散り來も

おほよそに思ひ設けたる胸のものを今やぶる
かに此のふる雪よ

歌會の歌（二）

雨雲の重くながる空のはてにおごそかなる
かもよ日に照れる山 十一月、茂吉庵小集

雨空の眞暗きはたての山の間たかに高原たかのながれ
日にひかり見ゆ

春の野^みをながるる水のさらさらと振舞ふ君を
憎しとや云はむ

いささかに振舞ふだにもあやぶめば母にそむ
かむ心ほりすも 十一月左千夫宅

明治四十四年

寒き石

○ 夕日かげ寒けき崖がきを石のいろの上に物うごく
小鳥にてあり

141 ○ 夕ちかき枯野をあよむ足のへの眼まなこにさむき石
の肌かも

石の面にふるるそよ風かれ草の影のゆらぎを
うすく置くかも

野にのこる日の薄らひの淋しさを石に觸りつ
き泣かまくするも

夕暮るる枯野の沈み眞悲しく心をなれと石に
よるかも

眞悲しきところに堪へず面伏せば風の歔歔に
草のなげきよ

石に居る野べのところに日の温みの残りを戀
ふも淋しかりけり

曇り風

○ くもり風ほの蒸す街のもの重く人おもおもと
うごき行くかも

いらいらする心をまちに出であゆみ曇りに歩
む我れうつつなに

物賣りの戯たがけのうたを聞きければ真ま晝ひるの街に
足もすくみぬ

○

黙々とひと行く街を高らかにうたひし唄のか
なしきかもよ

飴うりは立ちとどまりて頸を延べ鶏のごとく
にしてを唄へり

飴唄のいき繼ぐ見ればくしやくしやの顔ほど
け来て目鼻ひらきぬ

飴賣りのちどけ悲しく曇り街に面おもそむけつつ
我れはゆきけり 原作五句「走り行きけり」

わらべ等は彼のあかあかと唄ひいづる喉の色
はも見てを立つらむ

とほく来て胸和みつつ彼の面おもに忘れぬもの
を思ひ出だせり

しまらくを眼をひからせし兒の一人いま地を
打ちて去り行きけるも

少年の影見送りて見かへりつ館屋の業をかな
しと思ひき

曇り日の都大路に今日いでてこの我が見つる
生きの業はづかし

歸りゆかば妻子まつらむかしかすがに父らし
き面も汝がつくらむか

春動く

砂まじり木並にさやぐ風もぬくみ日日のちま
たに人も増加つ

い群れゆく人の衣のちらちらと色にほへる
街の上の春

○ 小雨ふりてぬくむ野の上はかれ草の色やはら
かに眼に新らしく見ゆ

○ 和なごぐもり雨ふりやみし道のべに枯れ草のいろ
ぬれて垂れたり

落ちゆく眠

○ わが息のかそけき音をそのままにうつつ静ま
り睡りゆくかも

物よろづ消えぎえになりて吾がうつつ凡おほにを
かしく隈に残れる

薄ら夜

四月九日歸京の途を松本市より迂廻し
 來りて、夜佐久高原をすぐ。微雨はれて
 月うすし。かの接する物すべて亡友の
 追憶を呼べる、旬日の信州滞在は今淋
 しき夢の如く、ひとり車窓によりて只久
 しきのみ。

○ 冷やびやとしづむ夜の原月うすくまばら林に
 家もこもれり

枯れ立ちの林にこもる壁のねむり月照りくれ
 ばしるけく浮くも

しらじらと夜の更けゆけば新芽あふく森に籠り
 てぬる夢ゆめを思ふ

輕井澤驛に着きたる時夜はすでに更けて、汽車また此處に果てたり。驛前の旅舎に入りたれど、直ちに黄燈の下に今宵の夢を眠らむは悲しく、野に出て、影の如く彷徨せんことを頻に願ふ。

もの思ひのかなしき胸をひと知れずうす月の野に泣かむとて出でぬ

○宵ふけて吾がゆく野べを草の家にくくと鶏啼くあはれ月夜を

亡きひとを思へばさびしくゆく野べに風ほの白き夜のくだちつつ

この潤む野の幽かそけさよ面影をさながらにして友が死にしと思ほゆ

高原たかねにこのうすらなる夜をふかみ泣きつつ茲こゝ
に消なばとぞ思ふ

涙盡なみだきて頬に吹きくる風ごち夜の原のうへ
に和なごみをるかも

○

○ 雲明りほのに動きて沈みよるこの高原は草も
ねむれり

汽車が来くとおもひ設まけつつ野を行けば遠とほの森
端はにてれる信號シグナル燈ル

うるほひの宜しき宵を野にたてば汽車かもと
ほく足にひびくも

燕の腹

○ 雨のいろに冴えひかりたる青葉路をつばめの
腹のひるがへり見ゆ

青葉路のあめの湿りの砂のうへ燕つばめとわれとふ
みつつぞ行く

○ つばくらのちひさく啼けば葉にぬれて日かげ
のうすく洩れこぼれけり

三井寺路上

青葉の息

青葉ふかく人にかくれて吾がいきを永世とこよにつ
けば悲しきろかも

吾をつつむ樹の葉のゆれの青々と胸にうれし
き生命いのちをゆるも

夕べ野はかすかなる世にそこごと青葉の息
のたち嘆くらむ

○ 山中のしづけき町に蟬の音の四方よそそぎて
くれ入りにけり

夜すがらを山に鳴くなる蟬の音に夢しらしら
と夜谷あけにけり

原作第三句「蟬の音の」第三句「谷あけにけり」

裳裾かぜかろく踏みいる山路の夕べをとほく
日も落ちはてしかな

森ふかくひらけし原の草のいろに朧ろ寂しく
立てる人あり

草の香のゆるかそけさよ何日の世かの吾れの
かなしく思ほゆるかも

峽のいろ

○ かげろふ野邊のはたての谷の戸に消ぬべくも
あはれ旅を來にけり

○ 谷の戸にかへりみすれば吾が道のゆふべを遠
く來る人もなし

ゆふ冷えの肌はだにせまれば谷の戸のおそろしき
色をあはれこの身に

蒼あを黒く暮れゆくいろにこもる瀬にきき入りけ
ればこの世にはあらず

谷の奥に蒼く消ゆべき旅の身をすぞろはかな
くかへり見にけり

静けさの極りぬれば谷あひを身ごころ失せて
やすけく行くも

星かげの淡きも見つつ行く谷にはからずも人
の宿うまや驛やに出でぬ

○ 峽かきのいろは宿しゆくに入るとき野の暮れに尙ほの青
く映え居たるかも

山峽やまがひのゆふべの宿しゆくの戸にくれば牛をかくみて
商あきなへるあり

伯樂がたかく笑へばたそがれの冷たさかげに
尾を振りにけり

○ ともし火のほのけき軒の暗かげに悲しく牛は
長鳴きにけり

かくのごと現実うつつともなき谷なかの吾が住める
世はやさしく思ほゆ

○ 黄昏かたの峽間はざまの宿しゆくのまぼろしに吾が會へる顔の
うらなつかしき

秋のはじめ

○ 秋づけば水際みぎわのくさに丹にの花のこもらふほどの戀こひに遇ふかも

せめて吾れまぼろしにだに遇はなむと思へば
今はさびしかりけり

○ 雨晴れの石のあはひの夕のいろ静けき土に蟲
なけるかも

○ まづしき心にすめば眼にしみて田の面の朝に
秋のいろ見ゆ

夜の驛の灯かけ寒けき前庭に砂舞ひ狂ふ人あ
らずけり

歌會の歌 (二)

冬の日の暫時しばしの晴れを人見えぬ野にいや訝ゆる
 村の音かも 二月、左千夫宅

とり毀こぼち物ちらばれる片町のさやぎも長閑に
 さす日かげかも 三月、茂吉宅

夕べ雨晴れし名残を傘のまま吾がふかく入る
 青葉みちかな 五月、子規庵

入日映はゆる濡れ葉のかげやもの云へばわが持
 つ傘にふるへあやしも

夕窓の空のひかりに冷やびやと震へやまざる
 葉の残りかも 十二月、百穂宅

○ 籠居こもりみの庭冬さびて愁はしく雲のかけ落ちおち
ては去るも

○

○ 冬鳥の啼きなくままに櫟原したびの笹を分け
入りにけり

大正元年 九月より

雨の夕暮

雨のいろと青葉のいろに浸りたる今日のまな
こに日は暮るるかな

○ しづかに見詰めてゐたる夕ぐれの冷たき雨を
ひさしと知りぬ

夕ぐれの雨をひさしく見つめたる吾れのまな
こよつめたかりけり

道そばの雨に暮れ行く木の間よりちちと短く
とり啼きたちぬ

○ 向つ尾のゆふべの家は雨のなかに何ごともな
く灯をともしけり

○

さわさわと風鳴りいでて雨の野は泣くことも
出来ぬ寂しさとなりぬ

○ 雨ふりて暮れゆく山をはるけくも入りてゆく
身が寂しかりけり

雨やみてやがて螢の見ゆる野をわが人力車ひ
とつ鳴りて行くかも

山ふかく雨まじり風吹ける夜のそこゆく人は
小さなるかも

母衣をうつさびしき雨におのづから鳥のやう
にし目を閉ぢにけり 原作第四句「鳥のやうなる」

谷に入れば數みだれたる螢火の燎爛の世界は
狂ひ廻轉れり

谷のやみうすれ初むれば懐かしきほのけき河
が流れよる見ゆ

しづかなる峽の奥はこの夜の雨にぬれつつ灯
を點すらむ

夜かへりて

ざびざびと雨ふり出でし今日のひる友かへり
てよ久しくなりぬ

秋雨は夜にふりつぎて友のことばなほ寂しく
も残り居るかも

あたたかに雨さく室むろにこもる灯ひのうら悲しき
に女をを思ふなり

かしの實の吾はひとり故わが友は妻まつから
に雨しとど降る

稻の月夜

ふとある夜月に起き出でて山腹のくらしき木の
間をあゆみて居たり

月よみの息づくいきのやはらかき觸りどころ
の熟睡なりしか

たまたまに月かげ明き向山に哀れなる目をあ
くる灯のあり

ふもとはは稲田のなかを真白なる誰が行くみ
ちぞとほく寂しも

ひとり行くこの月の夜に見えくるはみな吾が
知れるひとの家かも

○はらからも母らも家に眠るらむ吾れのみあゆ
む小夜更けにけり

稻のつゆに濡れつつ歩む夜のはだへ座るにひ
とに寄りたくなりぬ

山影のさみしきなかの安らかな稻のいろには
抱かれても見たし

をさなくて吾が飽くほどに垂乳根に抱かれざ
りしが寂しき夜なり

道々のつゆこる草になく蟲に聞きあまえつつ
行くところかな

かかる夜のおぼろを行けば遇ふひとの皆なつ
かしく草かをるかな

憂愁の都會

たづたづと雨にもならず太陽の呼吸にみやこ
 はあはれ朝よくもりぬ

物の音もひとゆく影もおぼほしく曇りへだた
 る街べを行くも

街にでて底べをゆけば曇りより知らざる顔が
 あまた出でくも

舗石の上に曇影ふみつつたまたまに己が足の
 音にさめ返るかな

霧おもく下り沈みたる街並みにふとかすかな
 る柳ゆれたり

何はなく寂しき街にぞろぞろと人ながれつつ
くもり行きけり

街々のうごきのなかは霧くらく降りて居るら
むとほくとほく行かな

曉は動くに

静かにまなこあくれば他ほかにまだ何かがありし
わがころかな

にこよかに胸にもたれしものあれば不圖手に
とりて思ひ出でつも

きぞの夜はにぞる灯^ほかけに赤々と吾が目に咲
 きし笑^{みま}ひなりけり

獨^い寝の何時ものやうなころにて目ざめしこ
 との何か寂しき

戸のそとの世のあかつきは海に似てとほく寂
 しく動き行くらむ

何鳥か幽かに啼きてほのぬるき眼^{まなこ}の底は灯の
 うつるなり

ともし灯は際^は涯^てなきかたの曉にふとさそはれ
 て沈むことあり

何にかもおびやかされてふと覺めし哀れなる
 ものはまた眠りたり

かすかにも眠りて行きし息なれば手に觸りか
ねつ明け行くかもよ

眼ぞこに笑みて静かに光りつつ吾をまてるも
ののこころ悲しも

初冬の郊外

ひさびさに街出てくれば郊外に落葉せるもの
は盡く^{exhaust}せりけり

ひと群れの落葉林はくろぐろともる樹あり
てけむりも見えぬ

冬がれの林のまへに燃ゆるごとき見の惱まし
き大根畑ありき

垣越しに竹むら見ゆれ夕ちかくやあかき日
にふるへ居るかも

郊外に空くもり来る夕まぐれ「天の法律學校」の
所を過ぎぬ

街かたのとほき没り日を背にしてこの土手道
に吾が影ふむも 向島六首

足とめて静かになれる土手の上をひとの足の
音のよりて来るかな

宮のおく行き詰るところ冷やびやと木の間の
家よ三味の音きこゆ

山茶花のしろき一本^{ひき}わがまへに木^きかけに口を
 顛はせけるも

土手下の小さき池面^{いけ}にどこよりか煙の來ては撫
 てゆく寒さ

○ 水ぞここに土手の樹映りたまたまは逆^{さか}さに人の
 うつりて行くも

雨の夜

雨だれの氣倦るき宵のふけゆくになほ私語^{ささめ}く
 は嫉たきひとかも

かかかる夜^よをもの音^ねたたば尾をゆりてとほく
 幽^{おぼ}かに消えいりぬべし

汽車が峽間の驛にとどまりて釜鳴りするが山
にさびしも 藪原

大正二年 四月迄

雨みづ久あふひ花

九月十日。それ迄の十数日間は木曾藪原の御寺の陰氣な奥座敷で、唯一人自分自分は、晝夜を超越した同じ静寂の中に包まれて、毎日暗い雨の音を聞きながら、法律と経済との書物に読み疲れて居た。而して時候が秋に入つてくると、

暗い部屋の疊の上には、弱つた蠅が夜と日となく、黒い天井からベタ／＼と落ちては集つて来る。それが一寸觸つてもコロリと動かなくなる程に、生命力の弱い蠅なのだから、何だか自分に罪障深いものが纏つてくる様な氣がして空恐ろしくなつた。丁度さう云ふときに、松本市の亡友の宅から皆て歸京の途次の訪問を待つて居ると云ふ言信があり、天候も急に霖雨が晴れあがつ

たので自分は明るい世界に救はれたやうな氣がして、躊躇なく荷物を整へて藪原を出發した。しかし流石に永く滞在してゐたその峡谷の景色と、又御世話になつた友と寺僧とには別離の愛惜を感じずには居られなかつた。加ふるに霖雨の後の高原の國には、既に初秋の冷氣が限なく降りて、汽車の道々自分の心を歸京の悦に躍らして計りは居なかつた。野の到る所に咲き亂れた寂

しい秋花、そここの畑から匂うて来る將に亡びんとする茴香の香、さう云ふものも又坐る私を濕やかな追想と省思との境に誘ふのであつた。偶々桔梗原を過ぐる時には、私はここに好むて遊んだと云ふ亡友の面影を思ひ浮べながら、茫然と永く外面に見入つた。かくして私は日暮に近く松本に着いたが、巷では近く帝都で行はるる、御大葬のこととが語られてゐるのを物淋しく聞いた。

野の花の目に揺れのこる今日をわれ夕暮れに
つつ家に來れり

今日の野は風ほの白く目覺めたる花を思へば
寂しかりけり

道々の秋野に花はゆらぎたれど尙ほ眼をとぢ
て見たきものあり

花をゆりて淋しく吹きし野のかぜに人行けり
しが影のごと思ほゆ

眼にのこる彼の野はとほく吾が友の死にゆく
影がいま行けるかも

この庭に草おとろふる頃はすでに死ぬべくも
みちは行きそめにけん

夕暮るる家に來たりて亡きひとの話にいまは
眼をつぶるかも

亡友の家に入った時には家族の人々の
寒げなる羽織姿を見た。数日の雨冷え
の名残である。それも何か寂しいもの
に思ひなしたが、尙ほ寂しく感じるの
は、母堂と私とを残して家の人々が暮
方の室を去った時であつた。母堂はこ
の十月半頃の亡友の三年の法會後、京

都の東本願寺に納骨に行きたい等としめやかに語られる。最早左様に年月が経つたかと私は今更のやうに物寂しく思つた。友は京都医科大学に籍を置く間もなくその地を踏まずして死んで仕舞つたのである。可憐むべきは豊かな文學的天分を受けながら天死した彼であつた。けれど斯様してその母堂と對座して、薄冷い夕べの空氣につつまれて居ると、痛しく哀れなるは彼ばかりではない。考へて見ると自分は親しい人には大抵秋に死なれて居る。庭を越えて倉の白壁には微かに夕空の色が映えて居た。

ひと逝きて三年と云へばその母と夕べしづかに居るところかな

此處よりはそらの眞洞の夕のいろが遙かはるかに眼に見ゆるかな

土の上に暮れゆく身にはむなしくも彼の高天たかあめ
に鳥消えにけり

空そらとほくもの思ひ居ればそはそはと軒のもの
屑くずゆれて来るかな

小庭さべにひそかに面をそらしつつ息長づけば
土よ湧くもの

我々の間には語り詰めた話がふと絶える時があつた。さう云ふ時には戸外から街の音が騒然と響いて来て、室内の空気は刻々と暮色を増して来る。その中に母君の眼は愈々思ひ深く輝き出て、ともすればそれが自分に優しく悲しく注がれて居るのであつた。私は唯だ出来る丈け身を靜かに坐つて深い思に沈んで居た。街の音は尙ほ響いて来る。死んだ友は幾度かかうした夕べを、

この母とすこした事であらう。さう思ふと今がつくづくと堆へがたくなる。

壁のうへに冷たく暮るる肖像おとがけにたまたま我れは目をそそぐかな

相向ふひとの息氣のいまは手にとるが如くにふり嘆くかな

しとしとと身にふりきたる夕暮れの今は淋し
ゑ立ちても行かな

風そよと鳴り行きにけれ驚きて目を上げぬれ
ば母も見しかな

このゆふべ母のまな子となりたれば心ことごと
となみだに濡れぬ

ふと見ると我々の前を一二間離れた庭の上に青銅の蓮形の水盤が立つて居て、水葵の花が一杯に暮色の中に咲きこぼれて居る。この花は懐に嬉しい然しながら淋しい冥想に、人を誘ふ薄紫色の花である。母堂の眼も私の眼もそれに注がれた。『我々の仰ぐ天は何時までも情緒の空でありたい。而して夫れは驚異と憧憬と冥想との空であり度い。』とかう語るときには死んだ友は、何時も

深く静かにその眼に燃ゆる或物を輝かして語つて居た。その後生き永らへて彼の生命が如何に展けて行くにしろ、恐らくこの感情基調より離るるを欲しなかつたであらう。今の場合私はこの静かなる夕暮の空氣の中に、甚しく情緒の緊張を覺えながら、目前の花に凝視し髮髻として、彼の面影の象徴を見出さんとし居るが如くであつた。母堂と自分の間にはもう話もやむて居たのである。

○ 夕ふかくいろ凝りたればくきやかに眼の前の
庭に花みえ來たり

○ 水盤は暗く冷たく地にうきて現心もなげに咲
きし花かも

むらさきに咲きたる花のうつつなさ苦しくも
母の目より離れず

あが眼まなこやさしく濡れてものいへば花は微かに
動くとするも

花の面はなにか醒めつつ來らしきに夕べ流れ
て夢のごと悲し

雨あめ久あひ花はなみてゐるうちに二つ許はかり夕べの花を開
きたるかも

花のへにそよると物の消えしかば吾等おもはず相見けるかも

かすかなるもの眼を開けておどろきぬ我れと母との夕べ花かな

何もかも冷たく暮るる庭にいま明るくさして灯が黠りけり

かはたれの庭に今まで見しものは亡きものと知りぬ耳にこぼろぎ

灯の色のやさしき中にたちねを今晴ればれと見出でつるかも

○

乳房ある御ほとけ見れば幼な兒のをさなごころにうれしくて泣かゆ

日没後

吾がための今日の野行きは暮れんとす道いち
いちになつかしきかな

日暮るればわが一行なつの夏すがた野をかげの如
くかへりゆくなり

かへり路ぢはなぐさにすれど影のごとく身をめ
ぐり行くひとの悲しさ

路のべの暗き夕べの花の色に見初めしもの
かなしかりけれ

蟲なけば道にとまりて吾れしばし暫時ひそかにな汝に
告げむとするも

野のかなた優しきこゑの呼びたれば遅れたる
身をいそぎ行きけり

かはたれの野の停車場にあはあはと點れる灯
には歸り來れり

○ 驛の灯に汽車まだ入らずいたづらに小兒らが
來てさわぎ居るかも

汽車の間を夜の構内に蟲きくと酒たづさへて
ふたり入りけり

構内の草に灯あかりさしたれど其處をば避け
て暗くすわりぬ

木柵ちかく殊にしきりに蟲なけば手に分けに
つつ草藉きにけり

わらはべは吾れらをさがしのこのこと只だひ
とり草をふみて來にけり

偶然たまたまに草にこぼれし酒の香の湧きたつ風の吹
き行きけるも

わが前の夜の目に二つ相似たるまなこ光りて
並びたるかも

をみならは町見に驛をいづるらし灯の彼方よ
も歌の聲きこゆ

草の上にふたり小暗くらくすわり居てこほろぎ聞
けばやや哀れなり

遠きへに小雨のごとく鳴くむしに身も濡るる
がに聞き入りけるも

草の上の夜の目に近く時たまに霧のごときも
の過ぎつつを居り

足のへにふと蟲鳴きほそり行くころひと見
まもればほのぼの寂し

吾がそばに人の足べに蟲ひとつ來居て鳴ける
が哀れなるかも

ひとは今ことば悲しくこほろぎの吾が耳ぞこ
にかたりけらずや

蟲の音にひとの歎なげ話わにきき入れば現し身なく
て涙ながれき 原作第二句ひとの談話はなしに

○ こほろぎよ勿な鳴きそこほろぎ野邊はいま月う
らうらと出でんとするも

萌芽

ひさしくて見ればかかげし妹の髪の毛のやや解れ
垂りて憎からなくに

橘花のいまだ含めるわが小女にかすかなる香
を聞くうれひなり

眼痛し

木枯のくらしき市路にあかあかと灯を求めつつ
來たりにしかな

家のなかには眼にくれなるに紫に動けるものが
囁りたちて 原作第四句「動きしものが」

賑はしきひかりの前にことさらに面映ゆき身
を立ちても居りし

ひそかなる街よりいでて晝すぎを他人の眼痛
く歸り行くかな

世のものに久しく遇はでありし如こころさみ
しく街ゆきにけり

風さむく街に吹かれて出でしかば我がゆく影
のあはれなるかも

うすれ日はをりをり晴れて街なかに明るくも
われを行かすことあり

ともすれば面にうすく夜の髪のかかれるかに
も手に拂ふかな

巷には影うすれつつ陽のまへを人ゆけりしが
なほも行きつつ

すさみ行く身に思ひかへる悲しさにこの踏む
道の砂ぼこりかな

夕されば更に悲しく街の音の身をゆりにつつ
湧きて来るかな

からからと荷ぐるま鳴りて来るかな我が前に
柄をなげて仆れ碎けよ

神経のまこと弱けれこの夕も永遠の別れと思
ひてかへる

萌え初めて乙女さびして生ふれども愛し子ゆ
ゑに言觸りかねつ

深宵の停電

街とほく消えゆく音をのこしつつ我が電車の
まは暗くとまりぬ

街のうへは遠くひかりて停電の電車幾列もと
まり居るかも

停電の街にとまりて外をさけば夜はひとしほ
に更けて居しかも

電線に雨そそぐごとき音をして電車いくつも
來ては停りぬ

外あかりは蒼くつめたく車箱のなかの人等の
面にふるへけるかも

窓をゆりて行く風のあり私語は蒼寒く車箱に
うまれ起りぬ

暗き窓に街うかがへば瓦斯の灯に木影を稀に
行くひとの見ゆ

○ 大き都會は眠るとすらむ夜の路に哀れなる反
古ひとつ轉がり行くも

秋の光

秋の野はひとに遅れて花つみて口ふれしほど
のひそや心や

はつ秋の日のひかり吹きてさやさやと何か笑
ましく風の行くあり

蝶々の身をはなれぬは兎もかくも衣きぬずれの音
の狂ほしきかも

手はわれは握るとしつつか氣をつきぬ道にゆれ
たる我毛香かほかな

むらさきに小さき花の目あぐれば野は行きつ
つもつつましくするも

夜の感傷

弱ければひとに嬌あまゆる我がこころ今宵もあは
れ息づけるらし

街々の光りの前は呼い吹きふかく吾が來たりけむ
しらしらと思ほゆ

歩みとめて止れば路は闇ふかくすべて静けし
この心かな

遠闇は風かも消ゆる聞きつつを孤獨ひそりごころに
眼を閉づるなり

もの思へば空のあかるみ夜の暗さしかして我
れのかへり行なり

御茶の水景情

曇り日の眼ましたの濠にどてのいろ青く映うつりて
光り居るかも

やや遠くに濠を蔽へる樹のしたを舟ひとつ見
えて漕ぎかくれけり

ほり底に舟木隠りに消えしころその木ぬれに
は砂吹きしかも

○濠の上を砂吹きゆけば樹末よりニコライ堂は
高く見えたり

ニコライの屋根みてあれば樹のかなた学校の
ベルの鳴りて居るかな

○秋淺き木の下道を少女らはおほむねかろく靴
ふみ來るも

街上に車馬ゆきかひてをどめらの群れてかへ
れば我れあゆむなり

いまし方を思へばまこと舟一つこの濠底を漕
ぎ行きしなり

街なかはこの塹濠ぞこの青ぐさに小舎ひとつ
あはれ見えて居るかな

街の砂の日ごと降りきて久ならむ濠底小舎の
屋根に積り居る見ゆ

小舎の戸には童子ひとり遊びゐて何時まで
も経てどのぼり來ぬかも

ほり水のよどみ濁りて流れねばそこに居る子
が哀れになりぬ

向う側にいま堤防かけを音蹶立てて火を散ら
しつつ電車はしりぬ

電車すぎて何かしづまる濠どこに暮れかたの
水頭へて居るかも

ほの暗き濠のそこべを上りくる荷のふね見つ
つ去りゆきけるも

工廠こうしやうの笛鳴り揺りて夕濠にあはれなるかもよ
船の唄聞ゆ 原作第五句「船の唄を聞きし」

街のへに面ふり向けば降りしものぬぐひたる
手は煤に染みしかも

この夕べの九段のそらに富士みえず赤く煤け
て日の入る凄さ

○夕映はとほく照らねば眼のまへの坂にはくら
くひと影ゆくも

灰色の雲の下びに低く見ゆる下谷したやの街は死せ
る色に見ゆ 原作第三句「低く見ゆれば」

冬より春へ

わが汽車の野をゆき居ればあとの驛よ他へ別
れゆく汽車の笛きこゆ 篠ノ井をはなれて

○ 雪野原とほき窪くぼみに晃きららかに夕さり來れば町
の灯が見ゆ 浅間温泉より松本市を望む二首

湯歸りのひと行ける見ゆ野の雪は蒼くつめた
く暮れて來るかな

灯のもとに我等ふたりを残し置きて宵はしづ
かに遠去りにけむ

灯のもとに物かき居れば面おもちかく書しよをくる音
のやさしくきこゆ

更くる夜にきき入りければ胸ふかくわれらの
呼吸は吐きあひしかも

夜の重さ欠呻したればふと我れよ去るものあ
りて安けくなりぬ

伽羅沈香を買はむと市に出でし夜騒亂のある
を見に行きにけり 二月十日

○ 籠居こりみのころの暗さ塀そとに羅宇屋らうやきたりて
久しくなるも

羅宇笛は息吹きやめずじめじめと耳にこころ
に突き入りくるも

街とほく彼のもの音ねのきこゆるは今追はざれ
ば逃げ行く如し

夜に入れば世はおぼつかなくて戀こひしさに今宵
も家はいでしなりけり 三月

宵はやくねむれる街のほのかなる光りのなか
を酔ひかへるなり

もの思ひなほ起き居れば下宿屋の夜を二時に
して地震はゆりぬ

○ 夜の地震すぐやみしかば電燈のゆれの名残り
を見守りにけり

地震なみゆりて夜の三階に起きし人わづかありし
がそれも静みぬ

あひ見てよ五月ごご経ねどかの友は春たつ今日を
婚めとりりけらずや

あしたより風ぬくみ立ちてそはそはと木並に
街に落居ぬ日なり

かりそめの身の過失あやまちのごとく世に惱しく
春立つらしも

もの皆のぬくもる今日の春かぜの都かなしく
野を戀ひ出でぬ

野に出でてはつはつ萌ゆる若草の色よろしみ
と妹いもうとをしぬぶかも

街の音の長閑にひびく晝すぎを兵營に櫻ゆれ
て居るかな 四月

この夜のころ細さをゴウガンの「若き母の像」
を枕まくらきてねにけり 原作第五句「枕きてぬるなり」

街のうへは朧ろに黄なる月出でて夜更けてぬ
 るく風荒ぶなり

歸るとき人目をしつつ見ざりしが夜の街を
 つつ寂しくなれり

向か臺の街裏ゆけるをとめらがここの庭べの
 木の間より見ゆ

飛行機

縁^{えん}目^めの人出のなかを吾がそばに兒供走りて叫
 びけるかも

群衆の顔は一時に湧くごとく空をあふげり日
 の降りそそぐ

なか空は遠くはるかに水のごとき光りのなか
を飛行機が見ゆ

日のしたを地の上とほく黒々とひとひ群れつ
つ流れて行くよ

○東京の空の飛行機陽のかたへ黒點となりて消
え入りにけり 原作第二句「空をはるかに」

大正十四年十一月二十五日印刷
大正十四年十一月二十八日發行

馬鈴薯の花奥附
定價壹圓八拾錢

版權
所有

著者 久保田 俊彦
著者 中村 憲吉
發行者 東京市外西大久保四五九
橋本 福松
東京市本郷區眞砂町三六
印刷者 左 手 薰

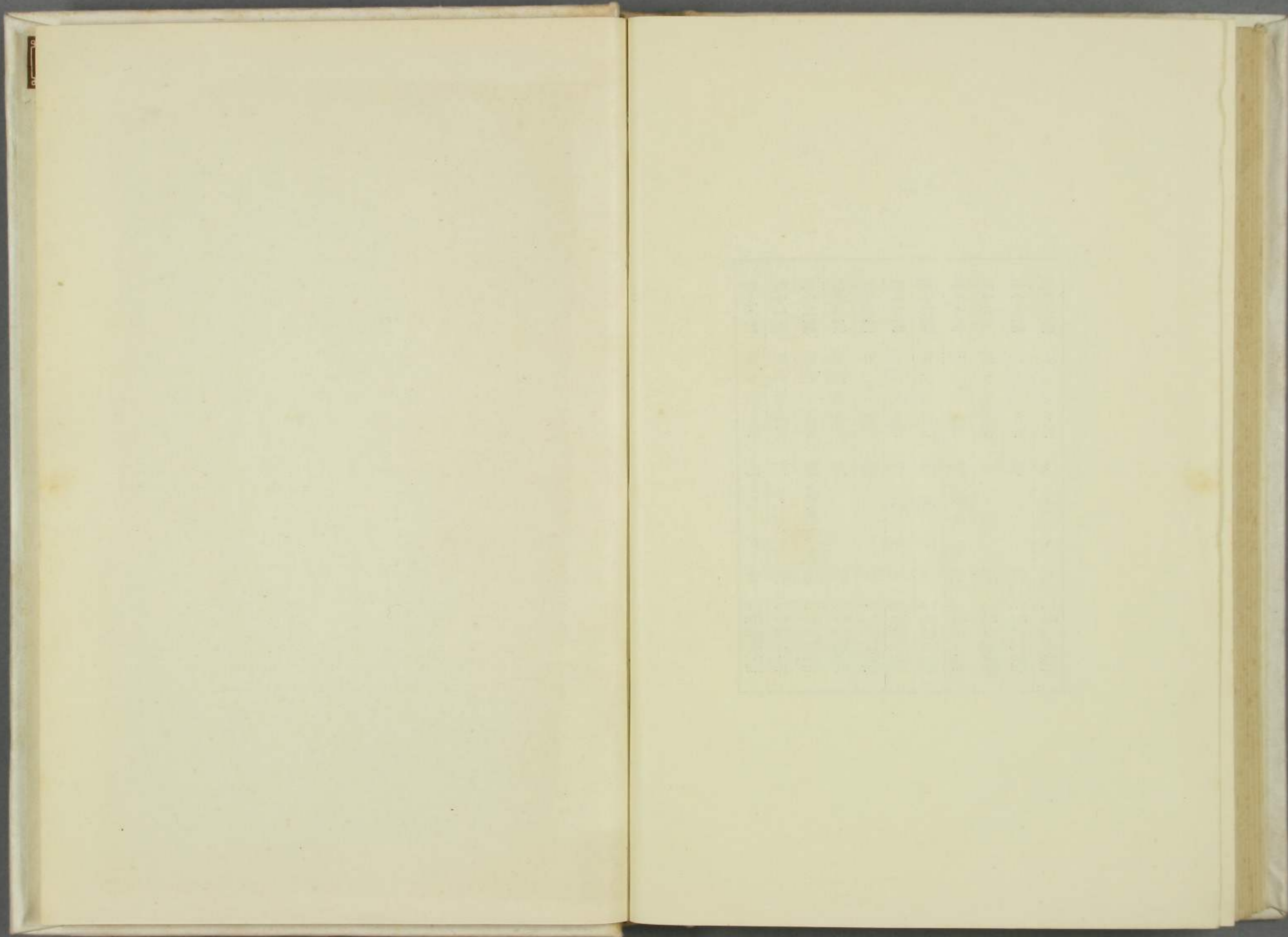
發行元 東京市外西大久保
四百五十九番地
古今書院
振替東京三五三四〇番

東京印刷株式會社 行印

アララギ叢書目次

第一編	島木赤彦 合著 中村憲吉	馬鈴薯の花	古今書院發行 定價壹圓八拾錢
第二編	齋藤茂吉著	赤 <small>しやく</small> 光 <small>くわう</small>	東雲堂發行 定價貳圓五拾錢
第三編	古泉千樞著	屋上の土	未刊
第四編	島木赤彦著	切 <small>きり</small> 火 <small>び</small>	品切
第五編	齋藤茂吉著	短歌私鈔	品切
第五編	齋藤茂吉著	續短歌私鈔	品切
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價壹圓八拾錢
第七編	齋藤茂吉著	童馬漫語	春陽堂發行 定價貳圓五拾錢
第八編	島木赤彦著	氷 <small>ひ</small> 魚 <small>を</small>	岩波書店發行 定價貳圓五拾錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	春陽堂發行 定價貳圓七拾錢

第十編	齋藤茂吉著	あらたま	春陽堂發行 定價貳圓四拾錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	春陽堂發行 定價壹圓五拾錢
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價壹圓五拾錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價壹圓八拾錢
第十四編	石原純著	霰 <small>あられ</small> 日 <small>ひ</small>	アールズ發行 定價壹圓八拾錢
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價壹圓八拾錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價壹圓五拾錢
第十七編	アールズ編 發行所編 大正十二年 東京出版	灰燼集	古今書院發行 定價壹圓八拾錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古今書院發行 定價貳圓貳拾錢
第十九編	村上成之著	翠微	古今書院發行 定價壹圓五拾錢
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價貳圓五拾錢



天牛書店
大阪南區道頓堀
番南二七四九